

・今年度の研究成果の公表状況

<自己決定とQOLプロジェクト>

論文：

坂本真紀・武藤崇・望月昭(2003):「養護学校における自己決定支援パッケージの効果に関する検討」. 行動分析学研究, 18(1), 25-37.

吉岡昌子・坂本真紀・武藤崇・望月昭(2003):「聴覚障害と知的障害がある個人における動詞・目的語2語文の獲得と一般化の検討」. 立命館人間科学研究, 6号, 55-66.

濃添晋矢・南美知代・望月昭(2004印刷中):「聴覚障害と知的障害がある生徒における携帯メールを使用した「おつかい行動」の獲得」. 立命館人間科学研究, 7号.

関本正子(2004印刷中):「聴覚障害者に対する効果的なコンピュータリテラシー・トレーニング開発の試み」. 職業リハビリテーション. 17巻.

学会発表：

濃添晋矢・南美知代・望月昭(2003):「聴覚障害と知的障害がある生徒における携帯メールの使用 - 鉄道駅における「駅名報告行動」獲得の検討 - 」. 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集, p.576.

南美知代・望月昭(2003):「重い知的障害があるろう者の携帯メールの使用 - メールによる地域店舗での要求充足(物品購入)行動の獲得」. 日本特殊教育学会第

41回大会発表論文集, p.705.

金山好美・望月昭(2003):「ADHD児における選択機会を用いた集団遊び参加の支援」. 日本行動分析学会第21回大会発表論文集, p.76.

安井美鈴(2003):「慢性期失語症者のQOLの向上を目指す積極的行動支援について」. リハビリテーションのための行動分析学会研究会公開シンポジウム、「リハビリテーションに現場における積極的行動支援」

<臨床社会学>

福祉サービスの第三者評価の上記の公開講座は、ミネルヴァ書房から『京都の福祉サービス評価の現状と課題』(仮題)として中村ほか編集により2004年7月頃に刊行予定である。

中村「臨床社会学の可能性」(『家族とアディクション』日本嗜癡行動学会誌、第20巻第4号、2004年1月)

<対人援助学の理論・方法・歴史 QOLサブプロジェクト>

サトウタツヤ・高砂美樹(共著)「流れを読む心理学史」 有斐閣 2003年10月

学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ7を刊行予定

<家族プロジェクト>

論文：

「配偶者からの暴力の加害者更生に関する調査研究」(内閣府男女共同参画局・2003年4月)

「DV - 加害者対策からみえてくること」『現代のエスプリ』第441号、2004年3月)

「ドメスティック・バイオレンス - 加害者対策」(『家族心理学研究年報』家族心理学学会、2004年6月)など

学会報告:

「第20回日本家族心理学大会シンポジウム報告」

<子どもプロジェクト>

論文:

高木和子「子育て支援をめぐる『支えあいの輪』の機能 - 子どもプロジェクトにおいて核となる概念の位置づけ -

松岡知子「保育所における一時保育を利用した母親の意識調査」

吉本朋子「育ち合う個と集団の相互作用過程 - 子育てサークルの親を中心に - 」

高田薫「共同問題解決過程としての子育て: 他者に頼ることで生じる人との付き合い」

春日井敏之「不登校の多様化と支援ネットワーク - 「父母の会」を中心に

津止正敏「障害をもつ子どもの放課後・休日の実態 - 京都障害児放課後・休日の実態調査から -

櫻谷真理子「今日の子育て不安・子育て支援を考える ~ 乳幼児を養育中の母親へ

の育児意識調査を通じて」

高木和子「24時間保育から考える これからの子育て・子育て」

<臨床教育プロジェクト>

研究論文:

中川吉晴「『教育における霊性』について」『トランスパーソナル心理学・精神医学』Vol.4, No.1

中川吉晴「ソマティックスにおける『からだとスピリチュアリティ』」『人間性心理学研究』21巻1号

中川吉晴「感情変容の臨床教育学」『立命館人間科学研究』7号

中川吉晴「ホリスティックな観点から見た教師教育」『教育文化』13号

共著:

中川吉晴 日本ホリスティック教育協会編『ピースフルな子どもたち』せせらぎ出版

学会発表:

中川吉晴 ラウンドテーブル「非暴力の教育」教育哲学会46回大会

<バリアフリープロジェクト>

論文:

Higashiyama, A., & Shimono, K. Mirror vision: Perceived size and distance in convex

mirrors. Perception & Psychophysics, 2004 (印刷中)

東山篤規. 身を守り実在感を与える皮膚

感覚 . GPnet(ジーピーネット) , 50(1),36-39.2003年 .

東山篤規 .精神物理学実験入門 1 :恒常法と極限法による閾値の測定 .ヒューマン・インタフェース学会誌 , 5(2),125-130, 2003.

東山篤規 .精神物理学実験入門 2 :ウェーバ・フェヒナーの法則と判断の原理 .ヒューマン・インタフェース学会誌 , 5(3), 195-202, 2003.

東山篤規 .精神物理学実験入門 3 :信号検出理論とその応用 .ヒューマン・インタフェース学会誌 , 5(4), 253-260, 2003.

東山篤規 .精神物理学実験入門 4 :サーストンの関節法とステープンスの直説法 .ヒューマン・インタフェース学会誌 , 6(1), 31-38, 2004.

学会発表:

東山篤規 .触重力方向の恒常性(2): 触的アウベルト効果 .関西心理学会第 115 回大会発表論文集 , p. 32 . 2003 年 .

山崎校 , 東山篤規 .視覚系と身体系による歩行運動での時間・距離・速度の知覚 .関西心理学会第 115 回大会発表論文集 , p. 35 . 2003 年 .

山崎校・東山篤規 .(2003年7月). 視覚系と身体運動系による歩行運動での時間・距離・速度の知覚 .日本視覚学会 2003 年夏季大会抄録集(湘南国際村センター) , p.219.

東山篤規 , 古賀一男 .ロール(横揺れ)運動をする身体の色度, 移動範囲, 移動時間の知覚 .日本心理学会第 67 回大会発表論文集 , p. 448 . 2003 年 .

對梨成一 . 階段の水平踏面が傾いて見える現象について(4) 段のつくる斜面と坂のつくる斜面の比較 . 関西心理学会第 115 回大会発表論文集 , p. 34 2003 年 .

對梨成一 . 2 階段の水平踏面が傾いて見える現象について(3) 仮想面における横断成分の知覚 . 日本心理学会第 67 回大会発表論文集 , p. 455. 2003 年 .

對梨成一 . ゆがんだ階段錯視 : 見かけの傾きに及ぼす横断成分と視点の高さの効果 .大阪交通科学研究会平成 15 年度研究発表会 . P. 17-18. 2003 年 .

学会発表(予定):

對梨成一 2004 坂道錯視 : 遠方の坂の見かけの傾きに及ぼす遠坂の形と手前の坂の効果 . 第 37 回知覚コロキウム(発表予定). 2004 年 .

<ライフデザインプロジェクト>

論文:

津止正敏・藤本明美・斎藤真緒『子育てサークル共同のチカラ - 当事者性と地域福祉の視点から - 』文理閣、2003 年 5 月

津止正敏・立田幸代子「障害をもつ子どもと家族の放課後・休日の実態 - 京都障害児放課後・休日実態調査から - 」立命館大学人間科学研究所『立命館人間科学研究第 7 号』、2004 年 3 月

津止正敏・津村恵子・立田幸代子『障害児の放課後白書 - 京都障害児放課後・休日実態調査から - 』クリエイツかもがわ、

2004年3月

津止正敏・足立陽子『学生とボランティア』立命館大学人間科学研究所、2004年3月(予定)

<高齢者プロジェクト>

論文:

吉田甫・大川一郎・土田宣明 2003 痴呆を伴う高齢者に対する認知リハビリテーションの効果に関する予備的研究, 立命館大学人間科学研究, 6, 1-9.

土田宣明・大川一郎・吉田甫 2003 高齢者を対象とした認知リハビリテーションの試み(1)-MMS と FAB による効果の検討 -、日本心理学会第 67 回大会発表論文集, 298.

大川一郎・土田宣明・吉田甫 2003 高齢者を対象とした認知リハビリテーションの試み(2)-日常生活への効果の検討、日本心理学会第 67 回大会発表論文集、299.

Yoshida, H., Okawa, I., Tsuchida, N. et al., 2004 Effect of Communication in Learning Therapy : Psychological Research, Second International Symposium for Learning Therapy.

<ヒューマンファラシー研究会>

論文:

Oda, M. and Isono, K. (2003) Impression of facial expressions with asynchronous movement of facial parts. 26th ECVF. PERCEPTION, 32, Supplement,

174.

北岡明佳 (2003) 動く錯視の分類 電機通信大学大学院・IS シンポジウム - Seeing and Perception. 10, 67-71.

Kitaoka, A. and Ashida, H. (2003) Phenomenal characteristics of the peripheral drift illusion. VISION, 15, 261-262.

Kitaoka, A. (2003) The frame of reference in anomalous motion illusions and ergonomics of human fallacy. Ritsumeikan Journal of Human Sciences, 6, 77-80.

北岡明佳 (2002) 錯視の Awareness とクオリアを考える 基礎心理学研究, 21, 69-73.

星野祐司 (2003) 再認記憶におけるファン効果の概念依存性: 干渉とメンタルモデル 立命館人間科学研究, 5, 155-169

星野祐司 (2002) 関連語の学習による誤再生とリスト構成: ブロック提示条件とランダム提示条件の比較 基礎心理学研究, 20 105-114.

松田隆夫 (2003) 知覚判断における「基準」の多様性とヒューマンファラシーの諸相 立命館人間科学研究, 6, 67-76

大中悠紀子・竹澤智美 (2002) 画像上の人物に対する絶対距離と相対距離の知覚 立命館人間科学研究, 4, 9-18

Yoshida, H. and Kawano, Y. (2003) "Logic of children" and "logic of subject matters": Effect of an instructional

intervention on understanding ratio concepts based upon children's informal knowledge. Ritsumeikan Journal of Human Sciences, 5, 145-154.
吉田甫 (2002) 関係推理と量的推理・割合概念の場合 立命館人間科学研究, 4, 1-8.

吉田甫・大川一郎・土田宣明 (1992) 痴呆を伴う高齢者に対する認知リハビリテーション研究の展望 立命館大学人間科学研究, 4, 77-98

森友紀・八木保樹 (2003) あいづちを用いた聞き手による偽装 立命館人間科学研究, 6, 43-54

学会発表等における口頭発表:

北岡明佳: 6件 尾田政臣: 3件

松田隆夫: 7件 星野祐司: 1件

八木保樹: 1件

<ボトムアップ人間関係論研究会>

論文:

佐藤達哉 (編) 2004 『ボトムアップ人間科学の可能性』 至文堂 現代のエスプリ

<人格発達と教育研究会>

論文:

高垣忠一郎・春日井敏之編 『不登校支援ネットワーク』 かもがわ出版、2004年。
(初版 3000部) なおこの中で、高垣忠一

郎は「セルフヘルプ・グループとしての『親の会』の意義」、「学校における教師とスクールカウンセラーとの連携のあり方」を執筆。春日井敏之は、「不登校の多様化・複合化と支援ネットワーク」、「居場所づくりとかかわる主体の成長」を執筆。29名の執筆者が共同して刊行した本書は、「父母の会」「小中高等学校」「地域の居場所づくり」で、内と外に開かれたネットワーク支援を志向しながら、不登校の子ども・青年など関わってきた京都府下の取り組みをまとめたものである。ともすれば対立傾向にある三者が、共同して出版した類書はこれまでにない。高垣忠一郎「思春期の子どもに『自己肯定感』を」京都教育センター編『季刊ひろば』136号、2003年。

櫻谷真理子「今日の子育て不安・子育て支援について考える - 乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通じて」立命館大学人間科学研究所『立命館人間科学研究』7号、2004年。

春日井敏之「不登校の多様化と支援ネットワーク - 『父母の会』を中心に」立命館大学人間科学研究所『立命館人間科学研究』7号、2004年。

春日井敏之「教育実践と学校カウンセリングの可能性」斎藤稔正・林信弘編『教育人間学の挑戦』高菅出版、2003年。

春日井敏之「中学生の心の内側をどう見るか - 弱者を攻撃する弱者の危機」『生活教育』656号星林社、2003年。

春日井敏之「多様化・複合化する現代の不登校問題 - 子どもの自立と求められる支援」京都府少年補導協会編『補導だより』264号、2003年。

春日井敏之「大学改革の時代に - 現代の学生をどうとらえるか」高等教育研究会大学職員フォーラム編『大学職員ジャーナル』6号、2003年。

・今年度の公開講演会・シンポジウム等の開催状況

4回の公開企画をはじめとして、プロジェクト主催の多くの公開企画やワークショップを開催した。企画は課題に関する幅広い関心を物語るように、遠方からの来訪者をも含み、いずれも、学内外の研究者・院生・学生、現場の実践者、当事者や幅広い市民の参加を得て、盛況であった。